



展望

2016年の振り返り

学長 鈴木 志津枝



2016年は、神戸市看護大学が今後の発展に向けて進んでいく上で、重要で意味のある1年であったと思います。大学の教育・学術研究活動や地域貢献活動、大学運営に加えて、新規事業や

協働事業にも取り組みました。

主な新規事業や協働事業として、4月6日には大学院看護学研究科に助産学実践コースの大学院生8名を迎え、大学院での助産師教育がスタートしました。現在、プログラムは順調に進んでいます。また、10月29日には開学20周年記念式典を開催し、教職員一同、神戸市看護大学のさらなる充実と発展に向けて目標を新たにいたしました。同日に神戸市看護大学同窓会が神戸市立看護専門学校同窓会、神戸市看護大学短期大学部同窓会と合併し、『神戸市看護大学同窓会あざみ』が誕生いたしました。そして、10月30日には神戸市看護大学の教員と在学生、卒業生、地域の看護職者を会員として4月に設立された、神戸看護学会の第1回学術集会記念講演会と第1回学会総会を開催いたしました。これらの事業は、重点課題として検討していた“本学と卒業生との絆の強化”“地域の看護職者とのネットワークづくり”につながっていくと確信しています。

さらに2016年には大学の第三者評価機関である大学基準協会による大学評価（認証評価）を受けており、2017年3月に

「大学基準に適合している」との評価を受ける予定になっています。振り返りますと、2016年は本当に事業の多い1年でした。教職員や多くの関係者の方々の真摯な対応により、多くの成果を上げることができたと自負しています。

今後の発展に向けての決意

今、神戸市看護大学は、これまで培ってきた大学としての蓄積を基盤として、大きな変動が予測される社会の中で、学生に選ばれる大学、学生や教職員にとって魅力ある大学、そして次世代に向けて発展していける大学を希求し、大きく一步を踏み出しました。

今後の発展に向けて、本学は社会の動きや保健医療のニーズを見据え、先駆的な取り組みを推進し、看護の質向上や看護学の発展にリーダーシップを発揮できる看護専門職者を輩出し、地域に貢献していきたいと考えています。そのためには、学生が主体的に学び、看護専門職者として自らのキャリアを切り開いていけるように教育研究支援体制を整え、教育や研究成果の発信力を高め、潜在看護師を含めた地域の看護職者の生涯教育の拠点としての役割や地域の知の拠点としての役割を果たす大学として、これまで以上に力を発揮していきます。

神戸市看護大学は教職員の叡智を結集して、さらに発展できるよう努力してまいりますので、今後ともご支援のほどをよろしくお願いいたします。

アンダーハンドパス

事務局長 丸一 功光



「看護大学事務局長に補する」の辞令を受けたとき、大学の回廊を1周して再びスタートラインに立ったような気がした。今から30年前、看護短大を4大化する検討が始まる頃、私は所管する市の病

院経営管理部にいたからだろう。

看護大学は、‘市民病院を始め地域に貢献できる優秀な看護師を一人でも多く育てる’ことはもちろんのこと、特に‘神戸の看護界を背負って立つリーダーを育てる’そのための新しい大学を創ろうということでスタートした。

そして、阪神・淡路大震災では、大学を予定どおり開学するのかそれとも中止するのかという厳しい選択もありながら、平成8年4月に1期生を受け入れ、現在230名を超える卒業生を社会に送り出している。

開学20周年は、記念式典の開催とともに同窓会の統合、神戸看護学会の設立などの環境整備、それに大学の質的向上を図るための大学認証評価の受験など、市の設置・管理のもと大学運営がなされてきたこれまでの総括と次のステップへの契機でもあった。

これからも選ばれる看護大学として存立し続けるには、大きく変化する地域社会の多様なニーズに応えるとともに、少子化による2018年問題への対応や大学教育改革の実施などに着実に取り組んでいかなければならない。そのためには、自律的、効率的で透明性の高い大学運営体制を構築し、他の看護系大学と同じ舞台で切磋琢磨しながらさらに魅力を高めていく必要がある。

今後、方向性が示されている公立大学法人への準備が本格化することになるが、私は、新しい大学を創ろうとした当時の思いを大切に、リオ五輪陸上競技男子400メートルリレーの選手のようにアンダーハンドパスで、次のランナーに確実にバトンを渡します。

開学20周年記念式典

記念講演

神戸市における看護教育に、永年多大のご貢献をしてくられた高橋令子氏にご講演いただきました。

元神戸市立看護専門学校長、元神戸市立看護短期大学副学長 高橋 令子

1 米軍病院における看護経験が私の看護教育観に及ぼした影響

昭和20年(私の20歳)も終わろうとする頃、原爆と終戦という荷物を背負って故郷姫路に帰ってきました。焦土の中に、お城と、赤十字を屋上に掲げた病院だけが目に入ったのを覚えています。その赤十字病院に復職し、ほとんど養成部の勤務をしていたと思います。昭和22年、突然米軍病院への派遣を命じられたのです。今の神戸市役所の西、当時は闇市と進駐軍の街と言っても過言でない中、焼け残ったピルの一つが病院になっていました。そこに着いた私達には通訳付きの研修が準備され、約1か月半毎日教育訓練を受けたのです。内容は、後になって知るのですが、新制度の高等看護学院で展開される基礎看護法でした。ベッドメイキングにはじまり、環境の整備や身の回りの世話です。赤十字で看護の基礎を包帯法から入った私には、何もかも新鮮でした。病棟内は勤務者も患者も笑みがあり、ゆとりがあり、明るい雰囲気でした。私達にも親切に接してくれました。人権という事を改めて学んだような気がします。

もう一つ学んだのは、衛生材料の配布のシステムの安全と合理性でしょうか。感染に対する徹底したシステムです。例えば、予防接種の準備を分隊ごとに行うわけですが、100人、時には200人近くになります。それでも注射針は1人1本で、まだディスプレイはなかったのでしょうか。この時期の中央材料室の作業は大変です。しかし日本では、1本の注射針で何人にも注射していくのに、誰もが何の疑問も持っていなかったようです。昭和25年、新制度の高等看護学院の専任教員として『新しい看護』を目指し、母校に復職する事になります。神戸での知識、経験、そして多くの講習会・研修会に出席して、ともかく前へ前へ進もうとしました。一条校での教育をすべきだと言い続けたのもこの頃からです。県への陳情にも何度か参りました。学生指導にも全力投球し、学生にはプロ意識、人格を備えられるような教育、つまり「自分の頭で考え、自分の意志で決定し、自分で責任を取る」ようになってほしい、それが基礎教育だと考えていました。先程の予防接種の改革や中央材料室の設置など、実習病院に働きかけ、波紋を投げかけたようです。

2 私が神戸に来た時の神戸市の看護教育

昭和34年、国民病と言われた結核、消化器伝染病を収容していた病院は、布引病院の一病棟になっていました。大きな疾病構造の変化、医学・医療の変化です。



布引に病院を建てるという計画が上がった時に、当然付属のように看護学校をお考えになったのだと思います。長田には戦前から看護婦養成所があり、戦後は乙種→准看護婦養成所になっていましたが、あまり関係がなかったのでしょうか。准看護婦には昭和31年に高等看護学院に進んで看護婦になる道が開かれる事になります。しかし、県内にはまだ1校も進学コースはありませんでした。だから、布引に看護学校を建てようという時、国も県も進学コースを勧められたのではないのでしょうか。私が依頼を受けた時にはハード面はもう完成していて、教務主任だけがいなかったようです。来てみて、その設備などの不備を指摘すると「ゆくゆく整える」との事で、もう入学試験・開校が予定されている状態でした。前へ進むしかなかったわけですが、私にとっては相談する人もなく、孤軍奮闘の毎日でした。

学生が入学して、学校は作られていきます。カリキュラムの作成と良い先生をお招きする事、自治会でクラブ活動をさせる事、それらの事に力を注ぎました。前院長の五十嵐播水先生が、俳句を教えて下さったのも、その大きな一つです。卒業生は学校を愛し、学んだ事を誇りに思うようになります。全寮制の利点も上手に活用できたと思います。

3 集中豪雨による水害や移民センターの閉鎖がもたらした神戸市の看護教育

昭和42年7月に集中豪雨による水害があり、学校の裏山が崩れて校舎の1階が土砂で埋もれました。水害の最も恐ろしいですが、後片付け、そして復興には長い期間を要します。当時、4月入学に切り換える事と3年課程を新設する事の準備に入っていたため、大変でした。国や県から災害復興や新しい課程設置の補助を頂き、昭和43年12月にやっと高等看護学院の建物が竣工、3階建てになり実習室や図書室などの設備が整いました。昭和45年に一課程が入学するまで、全国の看護教員養

成のために、この建物もお役に立ちました。建設中は、一部学生は夏休みを繰り上げ、仮教室を運動場に建て、体育の時間は場所を転々と探し求めて苦勞をしてくれたのです。

昭和43年6月に、専任の大西学校長が就任されました。先生は学校の45年の完成までの間に、学校の事務組織を確立し、庶務課長と教務課長を置き、事業所として独立させてくださいました。

45年に移民センターの利用問題が挙がります、大西先生は反対でした。私もやっと水害から立ち直り、一看・二看の課程が揃い、学校として充実してきた所なので、このままで思いました。しかし、46年になって話が再燃するのです。考えに考えた結果、2年課程の定時制を置き、「神戸市で育てた准看護婦に、全員看護婦になってもらいたい」と考え、移民センターをそれに当てる事と布引校舎に少しゆとりも欲しいと思いました。

4 中央市民病院の総看護婦長に就任した事で見えた看護教育の効果

昭和47年に高度医療に備えた臨床センター構想、教育研修、市民生活に密着した地域医療を理念とした日本一の病院作りを目指して、市民病院が動き始めました。病院長から、新しい病院作りのため、中央市民病院総看護婦長として来てほしいとの要請がありました。

当時新聞でも大きく取り上げられるようになった救急患者の問題は、社会問題でした。幸い市民病院の看護婦のほとんどは卒業生で、看護の理念は共通していますから、この社会問題をどう解決すれば良いか話をすればわかってくれました。救命救急センターが出来上がり、一般の市民の方々は非常に喜んで下さったと思います。ある元旦の日の出前、市長さんが直接勤務する者たちをねぎらいに立ち寄って下さり、市民の救急救命は中央市民病院の大きな使命と皆で考えるようになりました。

昭和49年、私は部長職になり、50年に学校の参事になり、また学校と関わる事になります。

昭和51年、ポートアイランドに市民病院の建設計画をする際で、院長、内科、外科部長と私は一緒に米国とカナダの病院に見学に行きました。コネチカット州立病院の見学の際に「本院は患者の生活の場としての病院である。そのコンセプトと異なる場合は、参考にならないだろう」と言われ、びっくりしたのを覚えています。患者の生活を考えた病院で、円形の建物、中央にナースステーションがあり、看護婦は患者までの距離が近く、病室の窓からは、緑などの自然が見え、それが患者の気持ちを癒す空間になっていました。薬剤部や栄養部などが中央に置かれ、そのままの病棟に、物品や薬剤、食事などが早く確実に運ばれる事により、医療ミスが少なく、感染が起こりにくいとの事でした。その病院を参考にして建設された病院が旧中央市民病院です。建築された当初は東洋一の病院と言われていました。見学した直後、病院長はこんな病院を建てたいなと、また外の3人も賛成しました。しかし、当時組合が強かったため、看護婦に反対されるだろうとも言われました。私は、そんな事はないと言い、私が代表で報告す

る事になりました。報告会では意見が百出しました。そこで一人の看護婦が「21世紀の病院を建てるんでしょう？そこから話をしましょう」と発言したのです。そして、それから病院では「21世紀の病院を・・・」が合言葉になり、皆の息が一つになりました。

その間も、高等看護学院では、神戸市民の医療、福祉のために、看護教育に終始深い情熱を持ち、優秀な看護婦の養成に努力していたのは言うまでもありません。特に、臨床実習に工夫をこらし、卒後教育に繋がられるようにしました。また、看護職が部長になった事により、院長や医師、市役所の幹部達とも看護教育について話をする事も多くなりました。また、神戸市の婦人団体協議会などとも交流が深まっていきました。これらが、短期大学(一条校)になるきっかけでしょう。

5 おわりに

私が何かをしたのではなく、卒業生が教育の結果を出してくれているのだと思います。救命救急センターの設立、新病院の設計を決めた時の「21世紀の病院を作るんでしょう」という言葉、学校側の臨床実習指導教員の設置など、これが教育の結果でしょう。

もう一つ考えられる事は、私が課長になり、部長になった時の事です。例えば、卵で言いますと、それまで私は中から外へ働きかけるように音を出していたと思います。しかし、地位をいただくと、途端に外から殻が破られるのです。そして、私に声をかけて下さる人が多くなりました。

私はただ種をまいただけの人のような気がします。確かに布引の土は硬かったし、耕し、肥料を加え、種から育てるのには少し初めは大変でしたが、種は立派に育ちました。次々と肥料も加えられ、百花園になったと思います。そして、短期大学ができ、この大きな花となって咲いたのが、この大学ではないでしょうか。でも、その百花園は、土を観察しながら次の種が育つようにしなければなりません。専門学校の卒業生がホールを建設するのに大変な協力をした姿に、この立派な花-ホールが建ち上がった日の喜びを思い出します。

次は、この大学が百花園を受け継いで下さる事を期待しています。



開学20周年記念式典

記念シンポジウム

本学の卒業生をシンポジストに迎え、
「神戸市看護大学の看護教育と今後への期待」をテーマに記念シンポジウムを開催しました。



座長より

療養生活看護学領域 慢性病看護学分野
教授 池田 清子

療養生活看護学領域 急性期看護学分野
教授 江川 幸二

本学を卒業あるいは大学院を修了された、シンポジスト4名の方から、現状の報告や本学の看護学教育、今後への期待などについて、プレゼンテーションをしていただいた。

現在、臨床・臨床・行政および大学で勤務しているシンポジストがおられたが、いずれの場合でも、自分が受けてきた看護基礎教育や大学院での教育に大きく影響されることが明らかになった。教育のもつ力というのはそれだけ大きいものだ、シンポジストのお話を伺っていて、改めて感じた。

仏教に「法灯を継ぐ」という言葉がある。お釈迦様の教えを、時代を超えて引き継いでいくといった意味をもっているが、このシンポジウムに合わせて、「法灯」とは神戸市の看護教育が発足当初より大切にしてきた理念と言いかえた方が良いのかもしれない。その内容は高橋令子先生のご講演にあったよう

に、時代のニーズに応じて新しい看護を主体的に追求していく姿勢や、自らの頭で考え、意思決定し、責任をとれるような人を育てることなどであろう。それを脈々と受け継いで今の神戸市看護大学の教育が成り立っているのだと思う。

そうした理念にもとづいた教育を受けた卒業生・修了生は、理念を実現するために地域や社会でますます活躍することが期待される。

また私たち教員には、そうして受け継いできた理念を大切にしながら、シンポジストの方々から本学の今後の教育に期待する内容として語られたブランド化や、看護とは何かを常に考えさせる教育など、卒業生・修了生が期待するものを具現化できるようにし、神戸市看護大学のさらなる発展を目指す責任があると感じた。

シンポジストからのメッセージ

神戸市立医療センター中央市民病院
看護師長 橋内 堅司

中央市民病院での卒後臨床教育と中堅看護師の教育・キャリア支援の実践について話をしました。中央市民病院は、臨床実践に強い看護師を育成する為、新卒からの3年間を臨床での基礎教育として臨床教育を実施しています。

1年目は、臨床に必要な看護の様々なスキルを学びます。合わせて、リアリティーショックを軽減し、仕事に適應できるように支援します。2年目では、ロールプレイやシミュレーション研修を取り入れ、臨床判断を養う研修を行います。また、対応困難な患者家族への対応研修など現場の現状に合わせた研修も行います。3年目は、これまでの看護実践の集大成としてケースレポートにまとめ、発表します。看護師としての成長を感じる瞬間でもあります。4年目以降は、より看護実践能力を高める為の専門研

修と専門職として成長できるよう神戸市看護大学編入、大学院進学、専門・認定看護師取得、留学といったキャリア開発支援制度を設けています。これまで、神戸市看護大学への編入が14名、大学院の進学が14名、専門看護師8領域14名、認定看護師17分野30名が制度を利用して専門性を高めています。また、役割モデルへの成長を支援する為、一昨年から6～8年目と9年目以降を対象に研修を行っています。キャリアデザイン研修の中では、このままの自分で良いのかという思いの中で日々過ごしていること、役割を担うが上司や同僚から承認される機会が少ないことがわかりました。継続教育において、中堅看護師がやりがいを持って役割を担っているための人材育成とその支援が今後の課題です。

神戸市立医療センター西市民病院 急性・重症患者看護専門看護師 林 有里

阪神・淡路大震災後の厳しい状況の中、神戸市看護大学が開学され幸運にも入学することができました。

学部の学びで印象に残っているのは、看護は「病気」ではなく「病人」を看護するartである、ということです。そして、「看護とは」を考え続けること、「自分で考えること」の大切さを学びました。

就職時は、フィジカルアセスメントを強みにするために経験を積んでから訪問看護の道へと考えていました。西市民病院に就職し、手術部で解剖・生理など知識を深めながら救急外来勤務もありました。その経験から急性期看護の道に踏み出すことになりました。患者さんの多くは高齢者であり、複数の疾患とともに生きていて重症化すると病態が複雑になることが多く、看護

師のアセスメント力や臨床判断、苦痛への援助はとても重要であると実感しました。大学院へ進学し、卒後は複雑な問題を抱える患者さんを担当して技術や思考を磨くこと、大学院で学んだ看護を実践に落とし込んでいくことを繰り返しました。CNSとしては、事象の複雑さや困難さを紐解きつつ相談者がケアの方法や看護に自信がもてるように関わっています。

自分自身を振り返り、「これからの神戸市看護大学に期待すること」を考えると、一人一人が看護を発展させていく原動力には「看護とは」を考える力、患者さんやご家族にコミットできる能力、コミュニケーション能力の3点が必要と考えるため、そのような学びが得られる大学であり続けてほしいと思います。

神戸市保健福祉局健康づくり支援課 保健師 稲村 和也

この度は神戸市看護大学開講20周年を迎えられたことを心よりお祝い申し上げます。一卒業生としてこのような記念すべき日を迎えることができたことを大変嬉しく思います。

私は平成21年度から4年間、神戸市看護大学でお世話になりました。その後神戸市役所に入庁し、西区こども家庭支援課を経て、この春より保健福祉局健康づくり支援課で勤務しております。

神戸市看護大学では実習、グループワーク、学園祭等のイベントを通し、様々なことを経験させていただきました。特に実習では患者さんに看護を提供する中で、実習メンバーと議論し、真摯に看護と向き合うことで看護職として必要な看護観の基盤やコミュニケーションスキルを学び、大きく成長できたように思います。

また私が、現在神戸市の保健師として従事しているのは神戸市看護大学が地域に根ざした大学であり、地域看護の重要性

を身近に感じる事が出来る環境だったからだと思います。

今後、大学に期待することは2点あります。1点目は全国に卒業生を輩出し、大学の質の高い看護を全国に広める。さらに研究機関としての機能を強化し、神戸市看護大学の「ブランド化」を図ること。もう1点は地域の大学として講演、イベント等を継続して実施し、神戸市民の健康寿命の延伸に努めていただくことです。

今後も数多くの卒業生を全国に輩出し、それぞれの分野において各地で活躍されることを期待しています。また神戸市の健康寿命の延伸のため、共に活動できることも楽しみにしていますので、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

神戸市看護大学の益々の発展を祈り、結びの言葉とさせていただきます。

神戸市看護大学 基盤看護学領域 基礎看護学分野 講師 玉田 雅美

私が神戸に来たのは、阪神淡路大震災のあった翌年でした。慣れない土地での1人暮らしが始まり、授業や実習、学校行事にバイトで大変というだけでなく、1期生であるが故「まず自分達がやるしかない」という環境での4年間でした。当時は自分の事しか考えられていませんでしたが、まだ公園に仮設住宅があり、復興途上にあった神戸で本学が開学され、私達が授業や実習を受けることができたのも、教職員や臨床の方など、多くの方々を支えてくださったおかげであると本当に感謝しております。

学生時代は看護師になれるか不安でしたが、4年生最後の実習で脳神経疾患を持つ患者さんに関わっていくなかで、「患者さんにもっとこうなって欲しい」という気持ちが自然に湧き上がるのを実感することができ、看護をやっていきたい、看護師にな

りたいと思うようになりました。そして、臨床を経て本学の大学院に戻ってきた際には、臨床で大切にしてきた事(私の看護観)は、学部での学びがベースになっていると感じました。

現在は、本学の教員として主に1・2年生の授業や演習、実習を担当しています。自分がこの大学で育ててもらったように、学生達には、自ら考え責任を持って行動できるようになってほしいと思いながら関わっています。看護職に向いているのだろうかかと悩む学生もいますが、いろんなことを経験し悩みながら、自分に合った看護の道を歩んでいけるように、今後も教員として支援していきたいと思っています。そして将来、同じ卒業生として一緒に本学の教育や同窓会の発展に貢献してくれることを願っています。

同窓会「あざみ」会長挨拶

同窓会「あざみ」の新会長となりました、第10期生の松井洋幸です。神戸市看護大学同窓会の会長としては4代目となります。同窓会「あざみ」が卒業生や在校生の身近に存在し、いつでも力になれるような同窓会を目指して努力していきたいと思っています。

神戸市看護大学は昨年開学20周年を迎え、記念式典が行われました。この良き日に、これまで個々に活動していた専門学校・短期大学・大学の同窓会が合併し、同窓会「あざみ」として新たな出発点を迎えました。同窓会の合併により、多くの先輩方との交流や協力が可能となり、これからの活動において、大きな力になることと思います。大学同窓会では、これ

同窓会会長 松井 洋幸 (神戸市立医療センター中央市民病院)

までホームカミングデーやあざみ祭への寄付を行って来ました。これに加え、あざみ祭の模擬店参加等、積極的に在校生との交流も図ってこうと考えています。また、20周年記念式典と同日に開催した、同窓会懇親会も継続して開催し、卒業生同士の交流だけでなく、在校生の参加も募る事で、神戸市看護大学同窓生全体での交流を図っていきます。同窓会「あざみ」の目的である、「会員相互の親睦と福祉を図り、母校の発展を助成すること」を実現するために、同窓生の皆様だけでなく、神戸市看護大学に関わるすべての方々のご協力が必要だと考えています。今後とも同窓会「あざみ」に、より一層のお力添えをよろしくお願いいたします。

開学20周年を迎えて

20年の歩みと未来への展望



療養生活看護学領域 精神看護学分野
教授 安藤 幸子

超えた今となっては、外で会って「私卒業生です」と言われるまで(あるいは言われても)気がつかないのが現状である。

開学当時はまだ公園や空き地に仮設住宅が一面に並び、私達教員も看護協会や他大学と連携してポートアイランドにあった約1200の仮設住宅を担当し、約1年3ヶ月に渡って訪問活動や健康相談会などを開催してきた。その後もまちの保健室や教育ボランティア導入授業など地域との交流は継続し、これが後の現代GPや地の拠点整備事業(COC)の採択へとつながっていった。地域貢献と教育研究が連動した本学の特色のルーツは、阪神淡路大震災とその後の地域との交流にあるのだと改めて思う。

この20年の間に本学は、博士前期課程の開設、博士後期課程の開設、編入生定員削減に伴う学部生の80名から95名への定員増、保健師課程の選択制の導入、ホールの建設や専門看護師課程の26単位から38単位への移行、助産学専攻科の大学院への移行、ワシントン大学やダナン大学との協定締結、そして20周年を迎えて神戸看護学会が設立されるなど、めまぐるしく変化発展してきた。この流れの中で、時には弱腰になった事もあったが、卒業生や修了生の活躍を見聞きし、卒業生が大学院で学び教員として次世代を育成する役割を担うようになった姿を見て、改めて本学で教員を続けてきて良かったと感じる。

今20周年を振り返って思うのは、これまで本学はいわば拡大路線で進んできたということである。しかし拡大路線だけでは学生も教員も許容量を超えてしまう。これからは大学の方向性やカリキュラム、様々な活動を精選し、量より質を大切にしたい地域に根付いた大学として発展させていくことが必要なのではないかと思う。私も定年まで2年余りとなったが、残りの時間を本学の発展に寄与し、リオ五輪の400mリレーのように流れを止めずにバトンを渡していけたらと願っている。

私は本学の開学と同時に着任したが、この間同期の教員の多くが定年や転職、進学等で退職したため、気がつけば看護系教員の中で開学からいるのは私1人だけとなった。光陰矢のごとしというように、私にとってこの20年はまさにあつという間の出来事であり、次々に現れる目の前の課題と格闘していたら20年経っていたという感覚である。したがって今回原稿を依頼されて、改めて20年という歩みを振り返った気がする。

本学への就職がほぼ決まり、まだ神戸という馴染みのない土地へ行くという実感が湧かなかった1995年1月、阪神淡路大震災が起こった。私は当時東京で働いており、震災の約1週間後にボランティアとして神戸の地に入ったが、その惨状を見て、「ああ、これで神戸行きの話はなくなった」と思った。しかし後日、予定通り開学の準備を進めるという連絡をいただき非常に驚いたことを覚えている。

初回の入試は30倍という超難関であり、私達教員予定者は各地から入試に駆け出し、ホテルに缶詰になって遅くまで入試資料に目を通したことが懐かしく思い出される。

開学から完成年次までは学生との距離も近く、編入生を含めほぼ全員名前と顔が一致していたが、年々人数が増えるに連れて覚えられなくなり、卒業生、修了生が2000名を

神戸市看護大学に校風と伝統を

専門基礎科学領域 医科学分野
教授 渡邊 定博

2007年3月発行の開学10周年記念誌をめくってみると、本学は開学初年度(1996年)に教員34名と職員10名でスタートしたと書かれています。現在のおよそ半分です。学生は1期生の1年生80名しかおらず、学内は今と比べるとずっと閑散としていた(はずでした)。しかし私にはそんな印象は残っておりません。学生も教職員も学内のすべてのことを立ち上げるために、毎日が新しい経験の積み重ねで、次から次へと新たに物事を決めながら前へ進まなければなりませんでした。

前へ進むというこの雰囲気は、当時の生活のあらゆる場面で感じられ、生活に張りがありました。委員会も当初は12しかなく(現在は22)、特定の委員会に所属してなくても動ける人が動いて物事を進める雰囲気がありました。

開学3年目に40名という大勢の編入生を受け入れるために、編入学委員会が作られました。私は編入生受け入れの事前調査で千葉大学にお話を伺いに行ったことがあります。編入生が疎外感を持たないように、できるだけ在来生と同じ環境にすることが大事とのアドバイスを受け、これ

に沿ってカリキュラムも編成されました。ところがふたを開けてみると、編入生からはなぜ編入生向けの特別プログラムが無いのかと反発をくらい、困惑したことが思い出されます。当時の学生は、在来生ばかりでなく編入生も大学を作っていくのだという気概が感じられました。

やがて学年進行と共に教員スタッフも増え、2000年3月には1回生が巣立ち、それを待つかのようには大学院(博士前期課程)が完成しました。その後、2005年には新たに助産学専攻科が立ち上がり、その一方では編入学定員が2012年から10名へ縮小され、学部への入学定員が95名に増員されるといった具合に、社会情勢に沿ってさまざまな組織改革が続きました。

大学の外とのつながりでは、開学当初の阪神淡路大震災の仮設住宅へのボランティア活動に始まり、まちの保健室活動や現代GP、COC事業などを通して地域とのつながりを深めてきました。今では、地域住民の方が模擬患者として

講義に参加して下さるまでになりました。

このように、これまでは高度経済成長期のように新しいものを作り続けて来ました。しかしこれからは、作り上げた大学をどう充実させていくかが重要になってきます。大学は、学生や教職員が時と共に入れ替わりながらも、何かしら一定のイメージが維持されていくもので、それが校風や伝統となっていくのではないのでしょうか。本学には校風とか伝統とか言えるものがまだ確立されていないかもしれませんが、しかし、言葉ではうまく表現できませんが、私はとどこころにその芽吹きを感じています。校風や伝統は、当事者が意識して形成するものではなく、日々の積み重ねの結果として醸し出されてくるものなのでしょう。ある日気づいたら、神戸市看護大学はこんな大学ですね、あそこの卒業生はこんな方が多いですね、といわれるようになって欲しいと願っています。

神戸市看護大学の歩みと課題

療養生活看護学領域 小児看護学分野
副学長 二宮 啓子

本学は、前年に発生した阪神・淡路大震災からの復興のさなか、健康と生活の安全を願う市民の声に支えられ、新たな保健・医療・福祉体制づくりの拠点として平成8年4月に公立の看護の単科大学として開学しました。当時は、看護系大学はまだ少なく、看護系短期大学からの卒業生に学士教育の道を作る3年次編入学の定員が40名と多いのが、本学の特徴でした。また、本学には神戸市看護大学共同研究助成制度が設けられており、教員同士や神戸市の臨地実習施設の看護職者と共同で研究できる環境が整備されていました。この制度は、当時としては珍しく、他の大学教員に羨ましがられたことを覚えています。私は開学3年目に着任したので、最初の2年間の大学の様子はわかりませんが、就任予定教員であったため、開学前に開催された就任予定教員の宿泊研修に参加しました。そこでは、各教員が自分の教育観について発表・共有し、これからみんなで作っていく大学への意気込みを感じました。今から考えると初代学長の中西睦子先生が仕掛けた最初のFD研修であったように思います。

平成12年4月には、「21世紀のヘルスケアシステムに対応できる高度看護専門職者の育成、看護研究者・教育者の育成」という目標を掲げて、大学院修士課程(博士前期課程)、平成17年に助産学専攻科、平成18年には、大学院博士後期課程を設置し、看護大学としてのすべての機能を備えた大学になりました。

一方、地域社会の保健・医療・福祉に貢献できる看護専門職の育成という使命を認識し教員は質の高い教育を行ってきましたが、地域の大学として地域住民に認識されるようになったのは、平成18年度に文部科学省の現代的教育ニーズ取り組み支援プログラム(現代GP)に採択され、「地元住民と共に学び共に創る健康生活」のテーマに教員が一丸となって取り組んだことが大き

かったと思います。終了後も地域住民から活動継続への強い希望が出され、地域連携教育・研究センターを設置し、活動を継続・発展させてきました。それが知(地)の拠点事業(COC事業)へとつながりました。

これまで教職員が協力して、社会の看護ニーズに対応し、大学を発展させてきました。しかし、今後もさらに速いスピードで社会は変化していきます。これに対応するためには、いかに優秀な学生や教員を確保するかが次の課題ではないのでしょうか。

未来への展望としては、本学で育てた卒業生が大学院に進学し、神戸市の病院、施設、行政、訪問看護ステーション等で看護のリーダーシップを発揮する、本学の教員として次世代の看護教育を担って神戸市看護大学を発展させていくという構図を作っていくことです。本学の卒業生は実践志向が強く、そのことはそのように教育をしてきた成果ではありますが、大学院への進学がまだまだ少なく、卒業生が自分のキャリアにおける将来の展望を持てるように支援していきたいと考えています。



大学点描

西区、須磨区で展開している「まちの保健室」の取り組み

療養生活看護学領域 慢性病看護学分野
教授 池田 清子

神戸市看護大学「まちの保健室」は、大学と兵庫県看護協会神戸西部支部との協賛として地域住民の健康ニーズを考慮した活動を行っており、参加者のニーズに応じて「健康支援」、「子育て支援(すこやかクラブ)」、「こころと身体の看護相談」、「子育て支援」の4つの活動を展開しています。

「健康支援」は、健康づくりの支援や急変時の対応、介護予防などをテーマに担当分野の教員が講義や体験学習、健康相談などを行っている。「子育て支援(すこやかクラブ)」は、小児看護学分野の教員が中心となり、子育ての中の保護者とその子どもを対象として、健康相談や子どもの発育測定、参加者間の交流促進支援などを行っています。「こころと身体の看護相談」は、精神看護学分野の教員らが、こころの悩みを抱えている方に看護相談を行っています。「もの忘れ看護相談」は、老年看護学分野および地域・在宅分野の教員らが担当し、もの忘れや認知症で不安や困りごとがある方・ご家族に対して、ミニ講義や個別相談を行っています。また平成26年度からは地(知)の拠点整備

事業「地域住民と共に学び、共に創るコミュニティケアの拠点づくり」にも参画し、須磨区の住民にも健康支援、認知症予防や対応、こころの健康などをテーマに活動を行っています。

平成28年度の「健康支援」のテーマのなかではとくに「生活体力測ってみませんか?」の人气が高く、100名を超える参加がありました。

また、本学の「まちの保健室」は開始から早や10年が経過しています。この間、学園都市をはじめとする近隣地域にも徐々に浸透し、現在では継続して参加してくださる住民も多くおられます。また、活動の様子は本学のホームページにも掲載していますが、今年は岐阜県立大学が本学の「まちの保健室」に目を留めて下さり、10月には教員と事務職員の皆様が本学に視察に来られるという嬉しい出来事もありました。

これからも学校の保健室のように、地域の皆様が気軽に何でも相談でき、健康づくりに役立つ情報の提供する「まちの保健室」をめざしていきたいと思います。



平成27年度「足は第2の心臓です～簡単!足脳マッサージ」



平成28年度「生活体力を測ってみませんか?」

海外看護学研修プログラム「米国・シアトル看護学研修」報告

療養生活看護学領域 精神看護学分野
助教 蒲池 あずさ

第6回海外看護学研修プログラム「米国・シアトル看護学研修」が2016年3月17日～3月30日に行われました。参加学生は1年生3名、2年生19名の計22名でした。

本格的な看護学実習を経験する前の学生が中心であり、日本における医療、看護の現状、アメリカの医療事情など、学内で事前に学習をして準備して行きました。

アメリカでの看護学研修においては、ワシントン大学で事前に見学施設の動画を英語で視聴した上で見学し、翌日には学んだことを英語で発表しました。訪問施設は、Children's HospitalやHarborview Medical Centerといったアメリカ屈指の医療施設をはじめ、地域に根付いた医療を行っているCountry Doctor Community Health Clinicや、リハビリテーション専門病院、多くの日系人が入居するナースホームと介護付き老人ホーム等を訪問しました。各施設で提供される医療や看護について説明を受け、事前学習した日米の医療、

看護の違いについて活発な質問がなされ多くの学びを得ることができました。ナースホームと介護付き老人ホームでは、学生が歌や踊りを披露したり、入居者の方々と日本語や英語で会話をしたり、楽しいひと時を過ごすことができました。また、ワシントン大学のリハビリテーション学科の学生との交流やキャンパスツアーもあり、実習時間数の違いや広大な総合大学での生活に興味深く話を聞き、お互いの理解を深め合っていました。

研修の一方で、アメリカでの生活も体験しました。フェリーで向かったBainbridge IslandやSpace Needle周辺の散策、The Cheesecake Factoryでの食事をするなど、参加メンバー全員で充実した時間を過ごしました。また学生は、ホームステイをしてホストファミリーと共に過ごし、映画を見たり、イースターイベントと一緒に参加したりするなど、英語でのコミュニケーションに苦慮しながらアメリカの文化に触れ、生活を楽しんでいました。複数の路線がある複雑なバスや地下鉄でのワシ

トン大学との行き来でしたが、2週目には皆乗りこなし、自由時間にはDowntownに繰り出してPike Place Marketでの買い物やStarbucks 1号店を訪問するなど、シアトル観光も満喫していました。

日常を離れて異文化に触れ、海外から日本の医療、看護を見つめ直す機会となり、広い視野を持たたのではないかと思います。この経験で得た学びを、これからの学習や実習に活かして欲しいと思います。



在外研修報告

海外でのデータセッションでデータ理解が格段に進展



写真1 トコジラミ

私は、2016年7月中旬から9月下旬までの約2ヶ月間、シカゴのちょっと西側にあるウイスコンシン大学マジソン校社会学部に在外研究員として滞在しました。現地では、トコジラミに全身を喰われたり(写真1)、宿舍の近所に買い物にいて道に迷ってしまったりというようなトラブルもありましたが、そういう生活面でのトラブルを補ってあまりある研究面での成果が得られました。この原稿では、今回の研修でもっとも有意義だった大学での「データセッション」に集中して感想を書くことにします。

データセッションは、私が専門としている「エスノメソドロジー・会話分析(以下EMCA)」という研究の方法として、世界中で広く行われているものです。近年の「EMCA」は、録音・録画機器の発達を受けて、それらの機器を積極的に活用する方向にあります。その背景には、人間の「直感的場面理解」を可能にするメカニズムというもの、複雑すぎてなかなか記述をしがたい、という問題があります。「EMCA」は、この問題に対して、①社会的に理解可能な相互行為的証拠物(視線とか、体の向きとか、発話とか)を詳細に検討し、②時間の流れに沿って並べ、③文脈を再現しながら確認すること、で対応しようとしています。そして、この対応がうまくいった場合には、我々の「直感的場面理解」が、「相互行為的裏付け」のあるものとして、第三者にも理解可能なものになります(専門用語で、この、理解を可能にする為の学的手続きを「再特定化(re-specification)」と呼びます)。

今回の在外研修においても、多くの「再特定化」に成功してきましたが、中でも以下の事例はもっとも驚きに満ちた「再特定化」でしたので、「写真」を添えて、報告致したく思います。

このデータは、2007年に撮影された動画です。当該研究(科学研究費基盤C、2007年～2010年、北村隆憲代表「介護保険法制の法社会学的研究-要介護度調査・認定過程の相互行為分析」)では、実際の『要介護度調査』に科研費研究メンバーが同席し、撮影を行ったのですが、その日は、9月12日でした。要介護度調査には、「季節見当識」に関する質問項目があり、テストは「今の季節はいつだかわかりになりますか」と聞きま

専門基礎科学領域 社会福祉学分野
准教授 榎田 美雄

す。その直後が、上記の写真のシーンです。動画だとよくわかるのですが、この場面は、季節について、ちょっと無理な説明をしている(冬と秋とのまんなか)被調査者に対し、テスターが、「瞠目(目を見開いて驚く)」しているところです。

被調査者は、このテスターの「注意喚起」に、機敏に対処します。すなわち、「誤り」とされた発話を「やり直します。つまり、もう一度「冬は」で語りはじめて「冬はちょっと早いんですけどね」と、直前の発話を無効化するのです。その上で、「夏が過ぎて秋を迎えて」と言い直します。そうやって9月12日の発話として許容される発話に、自らの発話を作り替える訳です。

この展開が、興味深い展開であるということ自身については、2007年から気が付いていました。しかし、今回ウイスコンシン大学マジソン校でデータセッションを行って、先方の大学の流儀で、動画に、カラオケ風に「テロップ(字幕)」をつける作業を行い、さらに英訳もつけて逐語的に解説しながら発表してみると、ビデオ内で行われているコミュニケーションの構造が、いままで以上に鮮明にわかってくる感じがしました。その結果、「文の言い直し」を被験者がしている、という整理された理解に達することができた訳です。この成果をもとに、2017年には国際学会での発表に進んでいきたいと思います。在外研修に出して頂いてまことにありがとうございました。



写真2 「冬と秋とのまんなか辺じゃ」で「瞠目」するテスター(左)

ピアの活動紹介

学部3年生 重田あかね（在学生3年生）

私たち思春期ピアカウンセラーはNPOひょうご思春期ピアカウンセリング研究会に属しており、神戸市看護大学だけでなく、兵庫県立大学、関西看護大学、京都橘大学を中心に兵庫県下で幅広く活動しております。ピアとは、仲間という意味で学校の先生や親より年が近く、思春期の時の悩みも最近経験してきたこともあり仲間であるという意味をもってピアという言葉を使っています。

現在の活動としては大きく二つあります。一つ目はピアエデュケーションです。学校の道徳や性教育の時間を頂き、中高生の時に悩む「生」や「性」について一緒に考える活動をしています。ピアっ子（思春期ピアカウンセラーの愛称）は学校側から生徒たちの悩みのニーズを把握し、プログラムを考えます。今はLINEなど、SNSが普及したこともありそういったもので悩みが膨らむ生徒たちも多くなります。そのニーズをくみ取り、ピアっ子同士で考え新しいプログラム作りも行っています。二つ目はピアルームです。名谷で場所をお借りしたり、ピアエデュケーションの後教室で話したい人に集まってもらい、集まっている中高生に声をかけ、中高生が気軽に相談したり、雑談ができる場を作っています。

今後の活動については、まずピアの活動をもっと兵庫県下に広く知って頂きたいと考えています。現在、少しずつピアという活動が広まってきていますが、まだまだ認知度は低く新しく取り入れて下さる学校は少ないことが現状です。しかし、口コミでも少しずつ広まってきています。だからこそ、ひと

つひとつのピアの活動を一生懸命に丁寧に行い、ピアエデュケーションを受けてくれた中高生たちが今悩んでいることを少しでもいい方向に答えを導けるようになったり、悩みが浮上したときにこんなことをピアっ子が言っていたなあとか改めて振り返ってくれるものになるようにしていきたいと思っています。ピアの活動は私たちピアっ子も日々成長していったり、現在の中高生たちがどういった悩みを抱えているかといったニーズを把握することが必要となってきます。今後も一人でも多くの中高生たちに寄り添えるような活動を行っていけるように努力を重ねていきます。応援宜しくお願い致します。



「訪問看護師が利用者・家族から受ける暴力の実態調査」 神戸市看護大学とのCOC共同研究の成果と感謝

北須磨訪問看護・リハビリセンター 藤田愛

私が訪問看護師になったのは平成10年でした。当時は身体介護を中心とした緩やかな訪問が多かったと記憶しています。しかし経済、社会生活、家族のありよう、人間関係、医療・介護の制度の変遷からか、失業、将来への不安、今の生活への不満、承認欲求の充足などがあふれている時代になってきました。それが訪問先の利用者や家族に表れてきました。

同時に訪問看護の対象者は、重症で医療ニーズの高いケースが増え、また、複雑な問題を抱える方が目立つようになりました。看護師への要求も多様で過剰なものへと変わってゆくのを感じていました。

徐々に利用者・家族による暴力が増え、様々な手段を講じても防ぎきれない暴力被害を経験するようになっていきました。神戸市の窓口で相談したところ、個人の経験談では行政は動けないと言われて、なすすべなく帰路に向かいました。そんな時、林千冬先生が看護師への暴力についてのご専門と聞き、実態をご相談しました。すぐに研究にしようとの提案をいただき、兵庫県下の訪問看護師に対して2015年度に「訪問看護師が利用者・家族から受ける暴力の実態調査」を実施することとなりました。2016

年には学会発表を終え、調査の結果を看護系団体、県行政、県会議員に持参し結果を報告し、実態と要望を伝えました。また共同通信社の記者による取材、新聞報道、神戸NHK放送での取材放送などで取り上げられました。多くの批判を受ける中、もっとも応援してくれたのは一般市民や利用者、利用者家族の方でした。「看護師さんが暴力を振るわれているなんて知らなかった。自分たちは看護師さんにいつも支えられている。自分たちも支えなければ」うれしい言葉でした。

そして、兵庫県は来年度より、①看護師の安全のための二人訪問に2,540円の補助、②暴力対策マニュアル作り、③公的相談窓口を看護協会に設置、④管理者を対象にした事例検討会・研修会を行うことが決まりました。長く抱え込んできた現場の問題が、調査研究という形にすることで、県政に届くことを実現し、そして大躍進の成果につながりました。いただいた成果を利用者や家族への看護、また育み合う、支え合う、守り合う地域づくりへの看護でお返ししたいと考えています。

林先生、今岡先生、花井先生、ご支援いただきました先生方に心より感謝申し上げます。

修了生から

神戸市看護大学と私

宮崎県立延岡病院 看護部 がん看護専門看護師
吉田希美

私は神戸市看護大学入学に夢と希望を膨らませ、受験勉強に励んでいたとき、阪神・淡路大震災の映像を目にしました。神戸を訪れ、大学までの道のりに震災の悲劇があり、衝撃を受けました。暗く沈む気持ちのなか、開学前の神戸市看護大学の外観は希望に満ちていました。学長はじめ多くの先生方から、一期生として期待を受け、震災後の復興とともに一歩ずつ成長してきたように思います。

大学は驚くほど、興味深く刺激的な看護の学問がありました。授業のなかで専門看護師の存在を知り、その役割を紹介されたとき、漠然と私の将来像を描いた覚えがあります。大学卒業後、神戸市立医療センター西市民病院に就職しました。がん患者・家族との出会いと別れを多く体験し、がん看護の難しさや奥深さを知りました。8年間働いた後、大学教員として勤めるなかで、心の底からがん看護専門看護師になりたいと思い、大学院に戻りました。学生時代の恩師達が温かく迎えてくれ、大学とのつながりに喜びを感じました。

大学院では自分自身の未熟さに気づかされ、主体的に学ぶことの本質を知りました。大学院で培った現象の捉え方、探求心そして忍耐力は、宮崎県立延岡病院でがん看護専門看護師とし

て組織横断的に活動するなかで、役立っています。がん看護専門看護師として、さまざまな苦難を乗り越えるために、大学院2年間の学びがあったのだと認識しました。大学でがん看護学領域の修了生および院生で構成された神戸市OCNS会が2ヶ月に1回行われており、相互に学び合うことは、リフレッシュやモチベーションにつながっています。そして、職場でよりよいがん看護の提供に力を尽くすことができます。

私は、開学から20周年を迎えた“いま”も大学とつながり、学びと活力を得ています。神戸市看護大学・大学院の卒業生であることを誇りに思うと同時に、大学へ貢献する使命を強く感じます。これからの神戸看護学会や各シンポジウムに参加し、看護学の発展に寄与していきたいと思います。未来に向けて神戸市看護大学の夢を描き、卒業生として何ができるのかを考え、大学とともに進み、成長し続けたいと思います。



大学の1年間

行事 * * * * *

2016年	4月 6日	入学式
	5月28日	あざみ祭・ホームカミングデー・大学院助産実践コースオープンキャンパス
	6月10日	特別講演会「発達障害って？当事者と共に学ぼう！」
	8月 6日～7日	オープンキャンパス
	8月25日	大学院博士前期・後期課程入学試験(8月31日合格発表)
	9月 2日	編入学試験(9月14日合格発表)
	9月26日	大学院特別講演会「看護実践向上のための研究支援」
	10月20日	特別講演会「ストレス対処力の支援と向上にむけて～看護におけるサルートジェニックアプローチの可能性」
	10月29日	開学20周年記念式典・講演会・シンポジウム
	11月 3日	看護専門職公開講座「看護の癒し～患者や家族と向き合う」
	11月19日	推薦入学試験(12月1日合格発表)
	11月24日	大学院特別講演会「The art of writing and analyzing open-ended descriptive questions」
	11月26日	第18回国際フォーラム 「看護研究における混合研究法の基礎と実践例～遠隔医療を用いた疼痛マネジメントの確立に向けて」
12月3日	COCシンポジウム「在宅医療を進めるための他職種連携～在宅ケアのつながる力を育む」	
2017年	1月14日～15日	大学入試センター試験
	2月 4日	国際シンポジウム「看護師の労働環境と産業保健」
	2月10日	大学院博士前期課程入学試験(二次募集)(2月15日合格発表)
	2月25日	一般選抜入学試験前期日程(3月7日合格発表)
	3月 4日	大学院オープンキャンパス
	3月12日	一般選抜入学試験後期日程(3月20日合格発表)
	3月15日	卒業式
～新年度予定から～		
	4月 5日	入学式
	5月27日	あざみ祭・ホームカミングデー・大学院助産実践コースオープンキャンパス
	8月 5日～6日	オープンキャンパス

人事

教員

退職				採用			
2015年	11月30日	和田 知世	助教	2016年	4月1日	畑中 あかね	講師
2016年	1月13日	服部 雄一	教授	4月1日	稲垣 聡	助教	
	3月31日	河井 伸子	准教授	4月1日	大澤 歩	助教	
	3月31日	赤田 いづみ	助教	4月1日	上瀬 芙美代	助教	
	3月31日	市之瀬 知里	助教	4月1日	崎山 愛	助教	
	3月31日	江口 由佳	助教	4月1日	高山 英子	助教	
	3月31日	黒澤 佳代子	助教	4月1日	萩岡 あかね	助教	
	3月31日	小池 香織	助教	4月1日	松野 史	助教	
	3月31日	谷川 千佳子	助教	4月1日	山尾 美希	助教	
	3月31日	堀田 直孝	助教				

職員

転出			転入				
2016年	4月12日	丹羽 央	事務職員	2016年	4月12日	姫野 正勝	事務職員

平成27年度国家試験合格状況

	保健師	看護師	助産師
受験者数	19名	94名	14名
合格者数	18名	92名	14名
合格率	94.7%	97.9%	100.0%

平成27年度学部卒業生・大学院修了生

学部卒業生	103名
助産学専攻科修了生	14名
大学院博士前期課程修了生	18名

平成28年度入学生

学部1年次	95名
学部3年次編入	8名
大学院博士前期課程	28名
大学院博士後期課程	4名

オープンキャンパス 予告

2017年度のオープンキャンパスは2017年8月5日(土)、6日(日)に実施予定です。本学入学をお考えの方をご存知でしたらどうぞお声をおかけ下さい。詳細は順次本学HPなどに掲載いたします。

編集後記

『回廊』14号は、従来のページ数を増やして、本学の開学20周年に関連した記事を中心に編集いたしました。昨秋の記念式典での高橋令子先生の講演を是非という多くの声を実現したほか、当日のシンポジストの方々等からのメッセージも掲載する事ができました。学生、教員の活動紹介の記事も盛りだくさんです。大学がこれからも、遠くからも見える時計塔のように堂々と立ちつつ、社会のいろいろな場所に深い響きを届けることができるように、一人一人の活動が伸びやかであるといいなと思います。(広報委員会)

神戸市看護大学

〒651-2103 神戸市西区学園西町3丁目4番地
 電話：078(794)8080(代表) FAX：078(794)8086
 E-mail：soumuka@tr.kobe-ccn.ac.jp Web：http://www.kobe-ccn.ac.jp